

日本語形態論試論 (その2)

上野 義雄

1. 序 説

本論では、Ueno (1994) を修正整備しながら、前回の上野 (1998) に引き続き、動詞、形容詞、そしていわゆる形容動詞の形態構造 (m-構造) における範疇 (m-CAT) と構成素構造を扱う。範疇、素性、PS規則などの考え方は、前回と同様に GKPS 版 GPSG (Gazdar et al. 1985) にならう。また、前回同様、派生、屈折、複合の3種類を想定する。派生 (1a) は語幹 (BAR-素性の値が 0) に派生接辞が付き、より大きな語幹を作る。これは繰り返し規則 (recursive rule) であるので、「働き始めさせられたがらない (hataraki-hazime-sase-rare-ta-gara-na-i)」のように、派生接辞が複数個付いた語幹の存在が許されることになる。(1b) は屈折の場合で、語幹 X[0] と屈折接辞から、語 X[1] (BAR-素性の値が 1 で、m-構造内の最大投射) が構成される。m-構造で語となったもののみが c-構造に写像され、c-構造における最小単位である統語元素 (syntactic atom) (Di Sciullo and Williams 1987) として機能する。(1b) は繰り返し適用が不可能であるので、屈折接辞が 2 個以上付く語は存在しないことになる。

(1) m-構造 ID 規則

a. 派 生

$X[0] \rightarrow X[0], \text{Aff}$ (Aff = 派生接辞)

b. 屈 折

$X[1] \rightarrow X[0], \text{Aff}$ (Aff = 屈折接辞)

c. 複 合

$X[1] \rightarrow X[1], X[1]$

動詞 (V)、形容詞 (A)、名詞 (N)、後置詞 (P)、形容名詞 (AN) (いわゆる形容動詞語幹のことで、たとえば、「花子に親切な男性」の「親切」)、動名詞 (VN) (たとえば、「日本を訪問中に」の「訪問」) の品詞を扱う。これらを $\langle N, \pm \rangle$ 、 $\langle V, \pm \rangle$ 、 $\langle I, \pm \rangle$ (inflectional) の3種類の素性を用いて(2)のように定める。Ueno (1994: 14-19) と同様に、松下大三郎 (1930) にならい、A と V は $\langle I, + \rangle$ 、AN と VN は $\langle I, - \rangle$ とする。従って、たとえば、A[0] と V[1] はそれぞれ、 $\{ \langle N, + \rangle, \langle V, + \rangle, \langle I, + \rangle, \langle \text{BAR}, 0 \rangle \}$ と $\{ \langle N, - \rangle, \langle V, + \rangle, \langle I, + \rangle, \langle \text{BAR}, 1 \rangle \}$ のことである。

(2) 品詞の素性分解

	<N, ±>	<V, ±>	<I, ±>
N	+	-	-
P	-	-	-
V	-	+	+
VN	-	+	-
A	+	+	+
AN	+	+	-

動詞と形容詞のおもな語形（すなわち、V[1] と A[1]）はそれぞれ(3)のようになる。形容詞のレ形は、上野（1998：37）では uresi-ker-e としたが、上代の形容詞已然形には、古い形-ke と新しい形-kere との2種あったことをふまえ、uresi-ke-re とする。（山口ほか（1997：20-21））現代語ではどちらの分析を採っても差がないので、歴史的に正しい方を採用することにする。

(3) おもな語形（V[1] と A[1]）

	母音語幹動詞	子音語幹動詞	形容詞
ル 形	tabe-ru	tor-u	uresi -i
レ 形	tabe-re	tor-e	uresi-ke-re
ヨウ形	tabe-yô	tor-ô	uresi-kar-ô
タ 形	tabe-ta	tor-ta	uresi-kar-ta
タリ形	tabe-tari	tor-tari	uresi-kar-tari
タラ形	tabe-tara	tor-tara	uresi-kar-tara
テ 形	tabe-te	tor-te	uresi-ku-te
ゼロ形	tabe	tori	uresi-ku
ロ 形	tabe-ro	tor-e	

m-構造においては、ru, re, yô, ta, tari, tara, te, NIL, roなどを値に取るFORM素性を想定する。したがって、動詞ル形のm-CATであるV[1, ru]は、|<N, ->, <V, +>, <I, +>, <BAR, 1>, <FORM, ru>|と表示できる。m-構造のV[1]はc-構造の統語元素Vに写像されるので、m-構造のFORM素性はc-構造のFORM素性として引きつがれることになる。したがってm-構造でV[1, ru]であるル形は、c-構造において、V[ru]として表われ、ル形動詞を主要部とする句、VP[ru]（すなわち |<N, ->, <V, +>, <I, +>, <BAR, 1>, <FORM, ru>|）を投射する。

2. FORM素性

上野（1998）では、m-構造においてA[0]-FORM素性、A[1]-FORM素性、V[0]-FORM素性、V[1]-FORM素性の4種類を区別したが、今回はGPSGと同様にFCR（Feature Co-occurrence Restriction）を用いることで、単一のFORM素性で済ませる。（Gazdar et al. 1985：27-29参照）FORM素性の値は、上記4種のFORM素性で想定した値の集合の和集合である。たとえば、(1a)は、m-構造で<FORM, ru>を持つ範疇は <I, +>&<BAR, 1>をも持たねばならないことを

要請する。

(1) m-構造FORM素性に関するFCR

- a1. $\langle \text{FORM}, \text{ru} \rangle \supset \langle \text{I}, + \rangle \& \langle \text{BAR}, 1 \rangle$
- a2. $\langle \text{FORM}, \text{re} \rangle \supset \langle \text{I}, + \rangle \& \langle \text{BAR}, 1 \rangle$
- a3. $\langle \text{FORM}, \text{yô} \rangle \supset \langle \text{I}, + \rangle \& \langle \text{BAR}, 1 \rangle$
- a4. $\langle \text{FORM}, \text{ta} \rangle \supset \langle \text{I}, + \rangle \& \langle \text{BAR}, 1 \rangle$
- a5. $\langle \text{FORM}, \text{tari} \rangle \supset \langle \text{I}, + \rangle \& \langle \text{BAR}, 1 \rangle$
- a6. $\langle \text{FORM}, \text{tara} \rangle \supset \langle \text{I}, + \rangle \& \langle \text{BAR}, 1 \rangle$
- a7. $\langle \text{FORM}, \text{te} \rangle \supset \langle \text{I}, + \rangle \& \langle \text{BAR}, 1 \rangle$
- a8. $\langle \text{FORM}, \text{ro} \rangle \supset \langle \text{N}, - \rangle \& \langle \text{I}, + \rangle \& \langle \text{BAR}, 1 \rangle$

- b1. $\langle \text{FORM}, \text{i} \rangle \supset \langle \text{N}, - \rangle \& \langle \text{I}, + \rangle \& \langle \text{BAR}, 0 \rangle$
- b2. $\langle \text{FORM}, \text{a} \rangle \supset \langle \text{N}, - \rangle \& \langle \text{I}, + \rangle \& \langle \text{BAR}, 0 \rangle$

- c1. $\langle \text{FORM}, \text{ke} \rangle \supset \langle \text{N}, + \rangle \& \langle \text{I}, + \rangle \& \langle \text{BAR}, 0 \rangle$
- c2. $\langle \text{FORM}, \text{ku} \rangle \supset \langle \text{N}, + \rangle \& \langle \text{I}, + \rangle \& \langle \text{BAR}, 0 \rangle$
- c3. $\langle \text{FORM}, \text{kar} \rangle \supset \langle \text{N}, + \rangle \& \langle \text{I}, + \rangle \& \langle \text{BAR}, 0 \rangle$

- d. $\langle \text{FORM}, \text{NIL} \rangle \supset (\langle \text{I}, + \rangle \& \langle \text{BAR}, 1 \rangle) \vee (\langle \text{N}, - \rangle \& \langle \text{I}, + \rangle \& \langle \text{BAR}, 0 \rangle)$
 $\vee (\langle \text{N}, + \rangle \& \langle \text{I}, + \rangle \& \langle \text{BAR}, 0 \rangle)$

3. 形容詞の語形

形容詞の語形を記述するために、A[0]のm-CATについて(2)のようなm-構造エントリー余剰規則を想定する。

(1) 形容詞語幹 uresi-のm-構造エントリー

FORM	m-CAT
uresi-	A[0, NIL]
uresike-	A[0, ke]
uresiku-	A[0, ku]
uresikar-	A[0, kar]

(2) m-構造エントリー余剰規則

形容詞語幹のm-構造エントリーは次の通りである。

FORM	m-CAT
XV-	A[0, NIL]
XVke-	A[0, ke]
XVku-	A[0, ku]
XVkar-	A[0, kar]

(2)は、形容詞語幹は母音で終わらなければならない事実を捕えている。実際、子音や撥音(N)、促音(Q)で終わる形容詞語幹は存在しない。(第15節参照)

形容詞のル形(A[1, ru])、レ形(A[1, re])、ヨウ形(A[1, yô])、タ形(A[1, ta])、タリ形(A[1, tari])、タラ形(A[1, tara])、テ形(A[1, te])、ゼロ形(A[1, NIL])などはそれぞれ、(3)の規則で規定される。ここで、屈折接辞(r)eと(y)ôは、それぞれ-re ~ -eと-yô ~ -ôという交替を示す交替接辞で、交替接辞に関する形態素境界条件(4)に従う。A[1]のm-構造を、それぞれの屈折接辞のエントリーの中でそのm-SUBCATとして表わさずに、(3)のようにPS規則で書いた理由の一つは、屈折接辞がゼロでX[0]がそのままX[1]になる場合が複数(たとえば、A[1, NIL]とV[1, NIL]、さらに古語の場合のV[1, a])あるからである。

(3) おもなA[1] m-構造規則

- a. A[1, ru] → A[0, NIL] i
- b. A[1, re] → A[0, ke] (r)e
- c. A[1, yô] → A[0, kar] (y)ô
- d. A[1, ta] → A[0, kar] ta
- e. A[1, tari] → A[0, kar] tari
- f. A[1, tara] → A[0, kar] tara
- g. A[1, te] → A[0, ku] te
- h. A[1, NIL] → A[0, ku]

(4) 交替接辞に関する形態素境界条件

-(r)u(ル形屈折接辞)、-(r)e(レ形屈折接辞)、-(y)ô(ヨウ形屈折接辞)、-ro ~ -e(ロ形屈折接辞)、-(s)ase-(使役派生接辞)、-(r)are-(受動派生接辞)、などの交替接辞については、形態素境界でC-Vとなるように接辞が選ばれる。

形容詞語幹が-si-で終わるもの(古語のシク活用に対応するもの)の中には、重複(reduplication)による語幹を持つものが多数含まれる。

(5) 「重複部+si」の語幹を持つ形容詞の例

- a. 1音節の重複を含む形容詞
おおい、めめしい、りりしい、すずしい、ゆゆしい、そうぞうしい、ぎょうぎょうしい、
- b. 2音節の重複を含む形容詞
あらあらしい、いたいたしい、いまいましい、ういういしい、かいかいしい、けばけばしい、
こうごうしい、なまなましい、なれなれしい、すがすがしい、にがにがしい、はかばかしい、
ばかばかしい、はなばなしい、みずみずしい、よわよわしい、わかわかしい、

2音節の重複を含む形容詞の類は、造語力が認められる。若者言葉で、「いがかいしい」(「いらいらする」の意)という例がある。(朝日新聞「日本語シンポジウム」11-15-98)ほかに造語力が認められる形容詞の類としては、「〜くさい」、「〜っばい」などがある。

(6) 「～くさい」

オジンくさい、オバンくさい、

(7) 「～っぽい」

やくざっぽい(人)、ルーズソックスっぽい(はきかた)

4. 交替接辞

4.1 交替接辞に関する形態素境界条件について

上野(1998:43)では、-(a)na- (否定派生接辞、たとえば「書かない」)、-(a)zu (否定派生接辞、たとえば「書かずに」)、-(a)nu (否定派生接辞ル形、たとえば「書かぬ」)、-(a)ne (否定派生接辞、たとえば「書かねば」)、-(a)sime- (使役派生接辞、たとえば「書かしめる」)も交代接辞として扱った。本論では、伝統的国文法と同様に、V[0, a]を想定し、これらの接辞は、交代しないものとする。つまり、-na-、-zu-、-sime-などが、m-構造でV[0, a]を補部取る(すなわち、m-SUBCATが[V[0, a] __])ことになる。したがって、「知らない」、「知らず」、「知らしめる」の形態素境界はsira-na-i、sira-zu、sira-sime-ruとなる。(第11節(2)参照)この変更の理由は次の通りである。

第1に、上野(1998:45-47)では、「始める、終わる」などのいわゆる補助動詞に関して、-(i)hazime-、-(i)owar-という分析(すなわち、母音語幹動詞に-hazime-、-owar-が付き、子音語幹動詞には-ihazime-、-iowar-が付くとする分析)(1d)は採らずに、これらの補助動詞はm-構造で一律にV[0, i]を補部取るという分析(1c)をした。この分析では、「始める、終わる」が独立の動詞の場合も補助動詞の場合も同一形態(すなわち、-hazime-、-owar-)を持つことになる。否定接辞-naについても、同じ扱いをする。すなわち、否定接辞-naも、語としての「ない」(「ある」に対する)と同一形態を持つものとする。

- (1) a. hazime-ru/owar-u
- b. tabe-hazime-ru/tabe-owar-u
- c. kaki-hazime-ru/kaki-owar-u
- d. kak-ihazime-ru/kak-iowar-u

第2に、「する」と「くる」の場合、m-構造でV[0, a]を想定する方法では、si-とko-をV[0, a]としてエントリーに登録する(母音語幹動詞と同じ扱い)だけで、si-na-iとko-na-iという語形が得られる。一方、否定派生接辞を交替接辞として扱った場合は、そもそも交替接辞とは、前に来る形態素の形が決まってはじめて次に来る交替接辞の形が決まるわけであるから、na-iがsi-とko-という形を選択するという状況は、交替接辞の考え方に沿わない。第3に、「する」については、si-na-iに対して、-zu-、-nu-、neの場合に、se-zu(「勉強せずに」)、se-nu(「何もせぬのに」)se-ne(「勉強せねば」)となる。すなわち、-na-はsi-を選択し、-zuと-nuと-neはse-を選択するという状況にある。これは、これらの否定接辞が主要部で、si-やse-が補部であるということを示していると解釈できる。第4に、使役形の言い間違いで、yoma-sase-ruやhataraka-sase-ruなどの例をよく耳にするが、このような言い間違いはV[0, a]という形の心理的実在を示していると解釈できる。

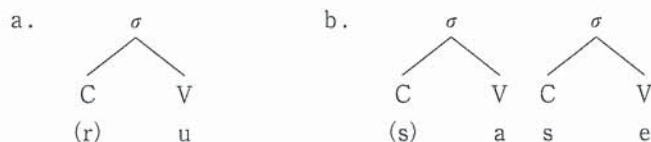
交替接辞に関する形態素境界条件（前節の(4)）は、現代日本語では母音の連続を自由に許すのであるから、純粹に音韻論上の条件に還元することは不可能である。したがって、(2a)のような例を排除するためには、形態（音韻）論上の条件として述べざるをえない。また、この条件の適用は交替接辞に限られる（2b）。

(2)

- a. *tabe-u ; *oki-u
- b. tabe_aki-ru ; tabe_owar-u

交替接辞の扱いは、上述のように、交替接辞に関する形態素境界条件として捕える方法以外にも、交替接辞にはあらかじめ音節構造が指定されているとして捕えることもできる。すなわち、(r)uの場合や(s)aseの第1音節においては、rやsはないこともあるが、子音のスロットは常に存在しており、このスロットはかならず満たさなければならない、という捕え方である。以下では、便宜上前者の考え方に従って論を進める。

(3) (r)u と (s)ase の音節構造



4. 2 使役交替接辞-(s)ase-について

上野（1998：59-63）では、現代語の使役接辞の形態について、伝統的国文法のように-sase~-se-という交替として捕えるよりも、-sase--ase-という交替として捕えるほうが、妥当性が高いことを、3つの根拠を挙げて示したが、より直接的な根拠は次の通りである。

伝統的国文法の記述では、-sase-は母音語幹動詞（すなわち、1段活用動詞）に付き、-se-は子音語幹動詞（すなわち、5段活用動詞）のV[0, a]（すなわち、未然形）に付くということであった（1a, b）。これは、取りも直さず（1c）のような、V[0, a]に-sase-が付いた形が存在しないということである。このことは、yobase-ruにおけるaが-sase-におけるaと同一のaであると考えれば説明がつく。このためには、使役接辞は-(s)ase-という交替接辞でなければならない。

(1) 伝統的国文法

- a. tabe-sase-ru
- b. yoba-se-ru
- c. *yoba-sase-ru
- d. yob-ase-ru

さらに、-sase~-ase-という交替接辞としての分析を採用すれば、使役接辞と本動詞語幹との接続について、伝統的国文法のように2つの場合に分けなくても、ひとつのm-SUBCAT（すなわち、[V[0, NIL] ___]、つまり、使役接辞-(s)ase-はm-構造でV[0, NIL]を補部にとるという指定で）（上野 1998：58）で済む。受け身の接辞-(r)are-についても、まったく同様で、そのm-SUBCAT

はやはり [V[0, NIL] __] である。実は、すべての交替接辞は V[0, NIL] を補部に取るので、この事実を余剰規則で一度述べておけば、m-SUBCAT の指定は不要になる。

(2) 交替接辞の m-SUBCAT に関する余剰規則

すべての交替接辞の m-SUBCAT は [V[0, NIL] __] である。

5. 子音語幹動詞

子音語幹動詞の語形を記述するために、m-構造余剰規則(2)を想定する。

(1) 子音語幹動詞 tor- の m-構造エントリー

FORM	m-CAT
tor-	V[0, NIL]
tori-	V[0, i]
tora-	V[0, a]

(2) m-構造エントリー余剰規則

子音語幹動詞の語幹 XC- の m-構造エントリーは次の通りである。

FORM	m-CAT
XC-	V[0, NIL]
XCi-	V[0, i]
XCa-	V[0, a]

子音語幹動詞の語形、ル形 (V[1, ru])、レ形 (V[1, re])、ヨウ形 (V[1, yô])、タ形 (V[1, ta])、タリ形 (V[1, tari])、タラ形 (V[1, tara])、テ形 (V[1, te])、ゼロ形 (V[1, NIL])、ロ形 (V[1, ro]) などはそれぞれ、(3)の規則で規定される。

(3) おもな V[1] m-構造規則

- a. V[1, ru] → V[0, NIL] (r) u
- b. V[1, re] → V[0, NIL] (r) e
- c. V[1, yô] → V[0, NIL] (y) ô
- d. V[1, ta] → V[0, NIL] ta
- e. V[1, tari] → V[0, NIL] tari
- f. V[1, tara] → V[0, NIL] tara
- g. V[1, te] → V[0, NIL] te
- h. V[1, NIL] → V[0, i]
- i. V[1, ro] → V[0, NIL] {ro, e}

6. 派生による子音語幹動詞の音便語幹

子音語幹動詞のV[1, ta] などにおいては、語幹と接辞との間に形態音韻論的变化が見られる(1)。

(1) 音便語幹

	V[1, ta]	V[1, NIL]
a. kar-	kaQta	kari
b. kat-	kaQta	kati
c. kaw-	kaQta	kai
d. sin-	siNda	sini
e. kam-	kaNda	kami
f. ukab-	ukaNda	ukabi
g. kas-	kasita	kasi
h. kak-	kaita	kaki
i. kag-	kaida	kagi

上野(1998:47-50)では、これらの形態音韻論的交替を説明するのに、タ形屈折接辞-taがすべての子音語幹動詞に対し、そのV[0, NIL]に付くと仮定し(前節の(3d))、派生を用いて説明した(2)。(2c)の鼻音化を受けたものは、はつ音調音点逆行同化(3)により、mがNとして実現されると考えた。「行った/iQta/」の場合は、/*iita/であるから、(2)のa3に対する例外である。また、このk, g-削除は、子音語幹動詞にのみ適用するように制限されねばならない。「飽きた」(aki-ta)、「過ぎた」(sugi-ta)などの母音語幹動詞には適用してはならない。

(2) (a1 > a2 > a3の順で適用；それ以外は順序なし)

a1. 有声化(進行同化)

t → d / {r, w 以外の有声子音} -__a

a2. i-挿入

∅ → i / {s, k, g} -__ta

a3. k, g-削除

k, g → ∅ / __i- {ta, da}

b. 促音化(逆行同化)

r, w → t / __-ta

c. 鼻音化

b → m / __- {ta, da}

(3) はつ音の調音点逆行同化の特殊な場合

m → n / __ [+dental]

タ形屈折接辞の-taは古語のタリに由来するのであるから、すべての子音語幹動詞に対し、そのV[0, i]に付く(たとえば、kari-ta, tati-ta, sini-taなど)と仮定したほうが、通時的には正し

いと言えるが、問題点が2つあった。第一に、「嗅いだ」kaidaをkagi-taから派生する際に、tからdへの有声化進行同化が、隣接した子音間ではなく母音iを介在したかたちで適用せざるをえなくなる。第二に、-taがすべての子音語幹動詞のV[0, i]に付くと仮定した場合、その語形は少なくとも現代日本語の音韻構造としてはwell-formedであり、一連の派生を引き起こす動機に欠けるように思われる。一方、-taがすべての子音語幹動詞のV[0, NIL]に付くと仮定した場合は、音韻論的に許されない子音連続を解消するために一連の派生が引き起される、という自然な解釈ができる。

7. 派生によらない子音語幹動詞の音便語幹

しかし、そもそも、タ形(そして、それに類する語形)は派生によって生成されるのであろうか? すなわち、母語話者は前節(2)の一連の規則(あるいはそれに類する一連の規則)と、その順序付けを習得しているのであろうか? もしそうならば、新しい、あるいは架空の子音語幹動詞に出会ったときに、そくぎにそのタ形が形成されるはずである。しかし、架空の子音語幹動詞を使った実験によれば、かなり多くの誤った語形が回答されるとのことである。(Vance 1987: 199-208) また、筆者が行った架空の子音語幹動詞を使った実験でも、ル形を与えておき、タ形を作らせる設問では誤りが多かった。しかし、正しいタ形をいくつかの選択枝の中から選ぶ設問では正答率が上がった。(この実験の詳細と結果の詳しい分析は、時間の関係上、次回に回す。)

これらの事実は、もし前節(2)のように一連の規則とその順序付けを習得した結果としてタ形形成が可能になった、と考えたのでは説明がつかない。なぜならば、派生を用いれば誤答が出るはずがないからである。また、ル形を与えておきタ形を作らせる設問と正しいタ形をいくつかの選択枝から選ぶ設問とでは正答率が変わるはずがないからである。

したがって、これらの事実はタ形形成が派生に依らないことを示していると解釈できる。ここでは、タ形形成が、子音語幹動詞の末尾子音に関するm-構造余剰規則として捕えられている可能性を考えてみる。

(1) m-構造余剰規則

a.	FORM	m-CAT
	Xr-	V[0, NIL]
	XQta	V[1, ta]
b.		
	Xt-	V[0, NIL]
	XQta	V[1, ta]
c.		
	Xw-	V[0, NIL]
	XQta	V[1, ta]
d.		
	sin-	V[0, NIL]
	siNda	V[1, ta]
e.		
	Xm-	V[0, NIL]
	XNda	V[1, ta]

f.		
	Xb-	V[0, NIL]
	XNda	V[1, ta]
g.		
	Xs-	V[0, NIL]
	Xsita	V[1, ta]
h.		
	Xk-	V[0, NIL]
	Xita	V[1, ta]
i.		
	Xg-	V[0, NIL]
	Xida	V[1, ta]

これらがどの程度 m-構造余剰規則として習得されているかは、個人差があると言わざるをえない。もし架空の子音語幹動詞を使った実験で正答率 100% の被験者ならば、これらの余剰規則を完全に習得していると言えるだろうし、正答率 0% の被験者ならば、まったく習得していないことになる。後者の場合、実在する子音語幹動詞のタ形を個別に覚えているだけで、上のような余剰規則にまで一般化されていないことになる。また、9種類の子音語幹動詞が異なった正答率を示すことから、どの末尾子音の場合が余剰規則として一般化されやすいかについても、違いがあるようだ。

8. 母音語幹動詞

母音語幹動詞の m-構造余剰規則は(2)のようになる。したがって、母音語幹動詞と子音動詞語幹を含むすべての動詞について、V[0, NIL] には子音語幹動詞の語幹（たとえば tor-）と母音語幹動詞の語幹（たとえば tabe-）とが含まれることになる。一方、V[0, i] には子音語幹動詞の語幹+i（たとえば tori-）と母音語幹動詞の語幹とが、また V[0, a] には子音語幹動詞の語幹+a（たとえば tora-）と母音語幹動詞の語幹が含まれることになる。V[1] m-構造規則は、5節(3)の通りである。

(1) 母音語幹動詞 tabe-の m-構造エントリー

FORM	m-CAT
tabe-	V[0, NIL], V[0, i], V[0, a]
oki-	V[0, NIL], V[0, i], V[0, a]

(2) m-構造エントリー余剰規則

母音語幹動詞の語幹 XV-の m-構造エントリーは次の通りである。

FORM	CAT
Xi-	V[0, NIL], V[0, i], V[0, a]
Xe-	V[0, NIL], V[0, i], V[0, a]

9. 現代語のサ変とカ変

サ変動詞「する」とカ変動詞「来る」は不規則変化であるが(1)、これら12の語形にどの程度の規則性が見られるか考えてみる。

(1) サ変動詞「する」とカ変動詞「来る」

	サ変	カ変
ル形	su-ru	ku-ru
レ形	su-re	ku-re
ヨウ形	si-yô	ko-yô
タ形	si-ta	ki-ta
タリ形	si-tari	ki-tari
タラ形	si-tara	ki-tara
テ形	si-te	ki-te
ゼロ形	si	ki
ロ形	si-ro	ko-i
否定形	si-na-i	ko-na-i
使役形	s-ase-	ko-sase-
受身形	s-are-	ko-rare-

まず、サ変動詞「する」について、V[0] を(2)のように定める。si-がV[0, i] となることは、第5節のm-構造エントリー余剰規則(2)による。この際、sa-がV[0, a] として現われないのは、あらかじめエントリーに与えてあるV[0, a] のsi-にブロックされるからである。ゼロ形は、V[1] m-構造規則(第5節(3))の通りとなり、否定形も規則通り(第4.1節参照)、また使役形と受身形も規則通りとなる。タ形、タリ形、タラ形、テ形についても、余剰規則通り(第7節(1)g参照)である。V[1] m-構造規則に従って、ル形にs-uが現われないのは、エントリーに与えてあるル形のsu-ruにブロックされるからである。レ形、ヨウ形、ロ形についても同様である。

(2) サ変動詞「する」(不規則子音語幹動詞)のエントリー(不規則部分のみ)

FORM	m-CAT	
s-	V[0, NIL]	
si-	V[0, a]	
su-ru	V[1, ru]	
su-re	V[1, re]	
su-beki	AN?	
si-yô	V[1, yô]	
si-ro	V[1, ro]	口語
se-yo	V[1, ro]	文章語

se-zu	V[1, NIL]	否定
se-nu	V[1, ru]	否定
se-ne	V[1, re]	否定

カ変動詞「くる」については、V[0] を(3)のように定める。ゼロ形、タ形、タリ形、タラ形、テ形については、V[1] m-構造規則（第5節(3)）の通り、否定形も規則通り（第4.1節参照）となる。

(3) カ変動詞「くる」（不規則母音語幹動詞）のエントリー（不規則部分のみ）

FORM	m-CAT
ko-	V[0, a]
ki-	V[0, i], V[0, NIL]
ku-ru	V[1, ru]
ku-re	V[1, re]
ko-yô	V[1, yô]
ko-i	V[1, ro]
ko-sase-	使役形
ko-rare-	受身形

10. 形容詞の否定形

上野（1998：72-73）で示したように、形容詞の否定形は、m-構造上ではなく統語的にc-構造上で構成される。すなわち、否定形容詞「ない」がc-構造でその補部にAP[NIL] を取ることで作られる(1)。(2)のエントリーのm-構造の部分は、第3節の(2)m-構造エントリー余剰規則によるものである。

(1) (かっこはAP[NIL] を示す)

- a. 太郎は [花子に厳しく] は ないが、
- b. 太郎は [[花子に厳しく] なく] は ないが、

(2) 否定形容詞 na-のエントリー

c-構造	
c-CAT	c-SUBCAT
A	[AP[NIL] _]

m-構造	
FORM	m-CAT
na-	A[0, NIL]
nake-	A[0, ke]
naku-	A[0, ku]

nakar- A[0, kar]

11. 動詞の否定形

上野（1998：73-76）で示したように、動詞の否定形、すなわち、動詞に否定接辞「ない」(2)が付いたもの(1)は、m-構造上単一構成素をなし、そのm-CATはA[1]である。(2)のFORMとm-CATのリストは、第3節(2)のm-構造エントリー余剰規則によるものである。

(1)

tabe-na-i/yoma-na-i
 tabe-nakar-ta/yoma-nakar-ta
 tabe-naku-te/yoma-naku-te

(2) 否定接辞-na-のm-構造エントリー

m-CAT A
 m-SUBCAT [V[0, a] _]

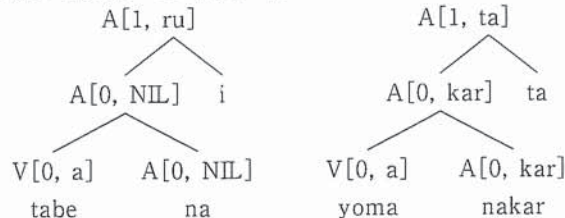
FORM	m-CAT
-na-	A[0, NIL]
-nake-	A[0, ke]
-naku-	A[0, ku]
-nakar-	A[0, kar]

(3) m-SUBCATを満たした例

FORM		m-CAT
tabe-na-,	yoma-na-	A[0, NIL]
tabe-nake-,	yoma-nake-	A[0, ke]
tabe-naku-,	yoma-naku-	A[0, ku]
tabe-nakar-,	yoma-nakar-	A[0, kar]

したがって、第3節(3)のA[1] m-構造規則により、「食べない」、「読まなかった」のm-構造は次のようになる。

(4) 動詞の否定形のm-構造の例



12. 古語動詞

ここでは、今まで述べてきた手法を用いて古語動詞の語形について考えてみたい。9種類の活用は次のようである。ただし、奈良時代の上代特殊かなづかいによる書き分けは無視する。

(1)

	ナ変	サ変	カ変	ラ変	4段
未然	sina	se	ko	ara	saka
連用	sini	si	ki	ari	saki
終止	sinu	su	ku	ari	saku
連体	sinuru	suru	kuru	aru	saku
已然	sinure	sure	kure	are	sake
命令	sine	seyo	koyo	are	sake
	上2	下2	上1	下1	
未然	oki	uke	ki	ke	
連用	oki	uke	ki	ke	
終止	oku	uku	kiru	keru	
連体	okuru	ukuru	kiru	keru	
已然	okure	ukure	kire	kere	
命令	okiyo	ukeyo	kiyo	keyo	

4段動詞と1段動詞とを比べると、連体形と已然形における屈折接辞は、それぞれ現代語のル形やレ形と同様に-(r)u、または-(r)eである。第3節(4)の交替接辞に関する形態素境界条件を仮定し、このことを明示的に表すと、次の表を得る。ハイフンは、V[0]と屈折接辞の境界を示す。活用表を整理するに当たって、次の3点を指針とする。できるだけ共通の屈折接辞が設定できること。いわゆる助動詞との接続関係ができるだけ簡潔に記述できること。3種類の定形動詞、すなわち終止形、連体形、已然形が同一のV[0]形(すなわち語幹)を持つようにすること。

(2)

	ナ変	サ変	カ変	ラ変	4段
連用	sini	si	ki	ari	saki
未然	sina	se	ko	ara	saka
命令	sin-e	se-yo	ko	ar-e	sak-e
終止	sinu	su	ku	ari	sak-(r)u
連体	sinu-(r)u	su-(r)u	ku-(r)u	ar-(r)u	sak-(r)u
已然	sinu-(r)e	su-(r)e	ku-(r)e	ar-(r)e	sak-(r)e

	上2	下2	上1	下1
連用	oki	uke	ki	ke
未然	oki	uke	ki	ke
命令	oki-yo	uke-yo	ki-yo	ke-yo
終止	oku	uku	ki-(r)u	ke-(r)u
連体	oku-(r)u	uku-(r)u	ki-(r)u	ke-(r)u
已然	oku-(r)e	uku-(r)e	ki-(r)e	ke-(r)e

ナ変、4段、2段動詞などから分かるように、V[0] のFORM-素性には、a、i、u、NILの4種類の値を考える必要がある。

(3) (ゼロは当該のV[0] FORMが存在しないことを示す)

	ナ変	サ変	カ変	ラ変	4段
V[0, a]	sina	se	ko	ara	saka
V[0, i]	sini	si	ki	ari	saki
V[0, u]	sinu	su	ku	∅	∅
V[0, NIL]	sin	∅	∅	ar	sak

	上2	下2	上1	下1
V[0, a]	oki	uke	ki	ke
V[0, i]	oki	uke	ki	ke
V[0, u]	oku	uku	∅	∅
V[0, NIL]	∅	∅	ki	ke

屈折接辞は、(r)u、(r)e、yo~eの3種類ある。(r)uは、終止形(以下、ル形V[1, ru])と連体形(以下、ウル形V[1, uru])を作る接辞である。(r)eは已然形(以下、レ形V[1, re])、yo~eは命令形(以下、ヨ形V[1, yo])を作る接辞である。

(4) V[1] m-構造規則

a. ル形

V[1, ru] → V[0, u] (ナ変、サ変、カ変、上2、下2)

V[1, ru] → V[0, NIL] (r)u (4、上1、下1)

例外 ラ変 XVri

b. ウル形

V[1, uru] → V[0, u] (r)u (ナ変、サ変、カ変、上2、下2)

V[1, uru] → V[0, NIL] (r)u (ラ変、4、上1、下1)

c. レ 形

V[1, re] → V[0, u] (r) e (ナ変、サ変、カ変、上2、下2)
 V[1, re] → V[0, NIL] (r) e (ラ変、4、上1、下1)

d. ヨ 形

V[1, yo] → V[0, NIL] {yo, e} (4段、ラ変、ナ変、上1、下1)
 V[1, yo] → V[0, a] {yo, e} (サ変、カ変、上2、下2)

(4a) のラ変の例外は、ラ変のエントリーに載せることにする。(4a, b, c) においてナ変、サ変、カ変、上2、下2はV[0, u] をもつ動詞で、ラ変、4、上1、下1はV[0, u] をもたない動詞である。(4d) において4段、ラ変、ナ変、上1、下1はV[0, NIL] をもつ動詞で、サ変、カ変、上2、下2はV[0, NIL] をもたない動詞である。この点に注意して、(4)を書き換える。

(5) V[1] m-構造規則 (定形動詞)

a. ル 形

V[1, ru] → V[0, u]
 V[1, ru] → V[0, NIL] (r) u (V[0, u] を持たない動詞の場合)

b. ウル形

V[1, uru] → V[0, u] (r) u
 V[1, uru] → V[0, NIL] (r) u (V[0, u] を持たない動詞の場合)

c. レ 形

V[1, re] → V[0, u] (r) e
 V[1, re] → V[0, NIL] (r) e (V[0, u] を持たない動詞の場合)

d. ヨ 形

V[1, yo] → V[0, NIL] {yo, e}
 V[1, yo] → V[0, a] {yo, e} (V[0, NIL] を持たない動詞の場合)

V[0, a] (未然形) と V[0, i] (連用形) については、そのまま (すなわち、屈折接辞がゼロで) 語 (すなわち V[1]) として用いられることもある(6)。ア形は V[0, a] が、イ形は V[0, i] が語として用いられた場合である。「ば、なも (上代)、なむ」などの後置詞は、c-構造でア形 V[NILa] (m-構造の V[1, NILa] に対応) を主要部とする節 S[NILa] を補部にとる。また、「ながら、つつ」などの後置詞は、c-構造でイ形 V[NILi] (m-構造の V[1, NILi] に対応) を主要部とする句 VP[NILi] を補部にとる。さらに、連用中止法は、イ形 V[NILi] を主要部とする従属節のことである。

(6) V[1] m-構造規則 (非定形動詞)

ア 形 V[1, NILa] → V[0, a]
 イ 形 V[1, NILi] → V[0, i]

13. 古語助動詞

13. 1 「る、らる」

伝統的古典文法では、4段、ラ変、ナ変動詞の場合には、その未然形に「る」が付き、それ以外の動詞の場合には、その未然形に「らる」が付くとされる。

(1)

kaka-re-zu	(4段)
sina-re-zu	(ナ変)
ara-re-zu	(ラ変)
se-rare-zu	(サ変)
ko-rare-zu	(カ変)
oki-rare-zu	(上2)
uke-rare-zu	(下2)
ki-rare-zu	(上1)
ke-rare-zu	(下1)

この記述の問題点は、第1に、なぜ「る」と「らる」との2種類があるのか不明である。第2に、なぜ、4段、ラ変、ナ変動詞の場合には「る」が付き、それ以外の動詞の場合には「らる」が付くのか不明である。まず気付くことは、4段、ラ変、ナ変動詞に限って、未然形が-aで終わる。したがって、問題の接続は、未然形が-aで終われば「る」が付き、未然形が-aで終わらなければ「らる」が付くと言いつけることができる。すなわち、次のような接続は起こらないことを述べている。

(2)

- * kaka-rare-zu
- * sina-rare-zu
- * ara-rare-zu

このことは、(イ)kakare-zuなどのいわゆる未然形のa(下線部)が、実は-rare-~-raru-におけるaと同一である、(ロ)rare-~-raru-は交替接辞であり、r(下線部)は子音に続く場合には現われないと考えれば説明がつく。したがって、「る、らる」の2種類をまとめて-(r)are-~-(r)aru-として扱う。

(3) 「る、らる」

m-構造エントリー (下2と同一)

FORM	m-CAT
-(r)are-	V[0, a], V[0, i]
-(r)aru-	V[0, u]

m-SUBCAT
 [V[0, NIL] __]
 [V[0, a] __] (V[0, NIL] が存在しない場合)

上の m-SUBCAT において、V[0, NIL] は 4 段、ラ変、ナ変、1 段動詞にしか存在しない (第 12 節(3)参照)。また、これ以外の動詞では、V[0, a] の末尾母音は a ではないことに注意。「す、さす」についても同様に分析できる。

(4) 「す、さす」

m-構造エントリー
 FORM m-CAT
 -(s) ase- V[0, a], V[0, i]
 -(s) asu- V[0, u]

m-SUBCAT
 [V[0, NIL] __]
 [V[0, a] __] (V[0, NIL] が存在しない場合)

13. 2 推量「らむ、らし、めり、べし、まじ」、伝聞「なり」

これらの助動詞は、ラ変動詞の場合はその連体形に、それ以外の動詞の場合にはその終止形に接続する(1)。ナ変、サ変、カ変、上 2、下 2 を見るかぎり、これらの助動詞が、V[0, u] に付いているのか V[1, ru] に付いているのか決めかねる。(第 12 節(3)参照) しかし、上 1 と下 1 の場合や、V[0, u] を持たない動詞があることなどを考慮すれば、問題の助動詞は V[1, ru] に付いていると結論せざるをえない。(第 12 節 (5a) 参照) また、これらの助動詞の直前の要素は、通常の文末の動詞のように、完了や過去、尊敬などの助動詞/補助動詞を許す(2)。そこで、(1) のような語形を複合語 (X[1] + X[1]) として分析する。プラスの記号 (+) は、複合語内の語と語の境界を示す。

(1)

ナ 変	sinu + ramu
サ 変	su + ramu
カ 変	ku + ramu
ラ 変	aru + ramu
4	saku + ramu
上 2	oku + ramu
下 2	uku + ramu
上 1	kiru + ramu
下 1	keru + ramu

(2)

a. 完了「つ、ぬ、たり」
 おぼつかなくおもひ-つ+らむ/ほととぎす声絶え-ぬ+らむ/夏来-たる+らし

- b. 過去「けり」
人ぞあり-け(る)+らし
- c. アスペクト(完了)-テンス(過去)
潮干-に-け(る)+らし
- d. 尊敬
思い乱れ-給ふ+らむ

(3) 「らむ」の m-構造エントリー

FORM	m-CAT
ram-	V[0, NIL]

m-SUBCAT
[V[1, ru] +__]

これらの助動詞がラ変動詞に接続する場合は、その連体形に接続すると言われている。ここでは、ラ変動詞(4)のル形に、Xriと複合語の第1成分用のXruとの2つの異形態を認める(5)ことで説明する。

(4)

- a. 本来のラ変動詞「あり、をり、はべり、いますがり」
- b. 形容詞カリ活用
- c. 形容動詞ナリ活用、タリ活用

(5) 「あり」の m-構造エントリー

FORM	m-CAT	m-SUBCAT
ara	V[0, a]	
ari	V[0, i]	
ar	V[0, NIL]	
aru	V[1, ru]	[__+ X[1]]
ari	V[1, ru]	

このように、独立に用いられる場合の語形(露出形)と複合語の第1成分になった場合の語形(被覆形)において、その末尾母音が異なることは、名詞複合語の場合によく観察されることである。(露出形と被覆形については、有坂(1957)参照)

(6) 露出形と被覆形における母音交替

- a. 「雨」(e~a)

ame	N[1]
ama	N[1]; [__+ X[1]] (例えば ama + mori)
- b. 「白」(o~a)

siro	N[1]
------	------

- sira N[1]; [__ + X[1]] (例えば sira + nami)
- c. 「木」(i~o)
- ki N[1]
- ko N[1]; [__ + X[1]] (例えば ko + kage)

14. 古語形容詞

ここでは、古語形容詞の語形について考えてみたい。ク活用（「高し」）とシク活用（「悲し」）の2種類があり、その語形は次のようである。

(1)

	ク活用		シク活用	
未然	takaku	takakara	kanasiku	kanasikara
連用	takaku	takakari	kanasiku	kanasikari
終止	takasi		kanasi	
連体	takaki	takakaru	kanasiki	kanasikaru
已然	takakere		kanasikere	
命令		takakare		kanasikare

カリ活用については後にまわすことにして、まずは本来のク活用とシク活用を考える。形容詞語幹 A[0] と屈折接辞との境界をハイフンで示すと次のようになる。

(2)

	ク活用	シク活用	
未然	takaku	kanasiku	susamaziku
連用	takaku	kanasiku	susamaziku
終止	takasi	kanasi	susamazi
連体	taka-ki	kanasi-ki	susamazi-ki
已然	takake-re	kanasike-re	susamazike-re

ク活用とシク活用との違いは、前者では、-siが付く語形は終止形のみだが、後者では、すべての語形に-si-または-zi-が付いている。伝統的古典文法では、シク活用の語幹を-siや-ziを取った部分（たとえば、kanasiとsusamaziにおいては、kanaとsusama）としているが、いわゆる形容詞の語幹用法(3)で問題が起こってしまう。すなわち、ク活用では語幹が現われる環境に、シク活用では終止形が現われてしまうことになる。したがって、シク活用では、-siや-ziを含めて語幹とし、終止形（ル形）の屈折接辞はゼロとする(4)(5)(6)。

(3) 形容詞語幹用法

a. ク活用

あな、めでた。(めでたし)

心憂のことや。(こころうし)

(299)

山を深み、(深し)
よげなり。(よし)

b. シク活用

あな、かなし。(かなし)
おかしのみぐしや。(おかし)
 山越しの風を時じみ、(時じ)
恐ろしげなり。(恐ろし)

(4)

ク活用		シク活用	
FORM	m-CAT	FORM	m-CAT
taka	A[0, NIL]	kanasi/susamazi	A[0, NIL]
takaku	A[0, ku]	kanasiku/susamaziku	A[0, ku]
takake	A[0, ke]	kanasike/susamazike	A[0, ke]
takak	A[0, k]	kanasik/susamazik	A[0, k]
takasi	A[0, si]		

(5) m-構造エントリー余剰規則

ク活用		シク活用		
FORM	m-CAT	FORM	m-CAT	
XV	A[0, NIL]	XVsi	XVzi	A[0, NIL]
XVku	A[0, ku]	XVsiku	XVziku	A[0, ku]
XVke	A[0, ke]	XVsike	XVzike	A[0, ke]
XVk	A[0, k]	XVsik	XVzik	A[0, k]
XVsi	A[0, si]			

(6) A[1] m-構造規則

- a. ゼロ形 A[1, NIL] → A[0, ku]

- b. ル 形 A[1, ru] → A[0, si]
 A[1, ru] → A[0, NIL] (A[0, si] がない場合)

- c. ウル形 A[1, uru] → A[0, NIL] ki

- d. レ 形 A[1, re] → A[0, ke] (r) e

カリ活用は、通時的には、A[1, NIL] + ariから発生したと言われている。たとえば、「悲しかり」は「悲しく あり」(kanasiku ari) から、uが脱落して、「アリ」と一語になった。ここでは、共時的にA[0, k]としてkanasik-を想定し(5)参照)、そこにラ変動詞派生接辞-ar-(8)が付いたと分析する(第12節(3)参照)。

(7) カリ活用

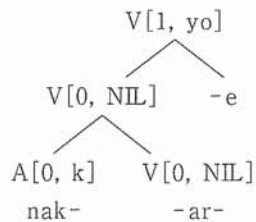
	ク活用	シク活用
未然	takak-ara	kanasik-ara
連用	takak-ari	kanasik-ari
終止		
連体	takak-ar-u	kanasik-ar-u
已然		
命令	takak-ar-e	kanasik-ar-e

(8) ラ変動詞派生接辞-ar-

FORM	m-CAT
-ara-	V[0, a]
-ari-	V[0, i]
-ar-	V[0, NIL]

m-SUBCAT
[A[0, k] _]

(9) 「なし」の命令形「なかれ」の m-構造



15. 形容名詞

15. 1 形容名詞の生産性

形容詞と形容名詞（いわゆる形容動詞の語幹）は、性質を表わすという同一の意味機能を担いながら、前者は「ナウい」などの例外と少数の形容詞派生接辞（第3節参照）を除くと、造語力を完全に失っている。後者はきわめて生産的な語類で、性質を表わすという意味機能を担う新語や外来語はすべて形容名詞となる。

(1) 形容名詞の例（女性週刊誌の新聞広告から）

- ドレスな女
- フルティーな味と香り
- 「恋は電撃」な女たち

この形容詞と形容名詞の生産性の違いは、何が原因なのであろうか？少なくとも、次の2点が考え

られる。

- (イ) 形容詞語幹（たとえば、「おもしろい」における「おもしろ」）の末尾部分にはさまざまな形態的制約がかかっているが、形容名詞（たとえば、「しずかな」における「しずか」）の末尾部分にはなんら形態的制約がかかっていない。
- (ロ) 形容詞は2重に語形変化する。まず、語幹がA[0, NIL]、A[0, ke]、A[0, ku]、A[0, kar]と4種類あり、さらに、それぞれが決まった種類の屈折接辞を取る。一方、形容名詞の場合は、語形変化せず、屈折がない代わりに繫辞（いわゆる断定の助動詞）「だ」の変化形の助けを借りる。

この2点は、「研究する、アタックする」などVN suruが生産性を保っている理由と同じであると考えられる。

15. 2 形容詞語幹と形容名詞との末尾における形態的制約

形容詞語幹には、少なくとも次のような形態的制約がある。

- (イ) 語幹の末尾母音がeの形容詞は存在しない。（(1)参照）
- (ロ) 語幹末尾が撥音（N）の形容詞は存在しない。
- (ハ) 語幹末尾が長母音の形容詞は存在しない。（「遠いtoo-i」（古語では「とほし」）は長母音ではなく、同一母音の連続である。）
- (ニ) 「ちっちゃい」などの例外（ゼミ生元紀美子の指摘）を別にすれば、語幹末尾が拗音の形容詞は存在しない。

(1) 形容詞語幹末尾の母音

- a えらい、たかい
- i おかしい、おおきい
- u わるい、にくい
- e
- o おもしろい、よい

一方、形容名詞の語末には、このような形態的制約は見られない。

(2) 語幹の末尾母音がeの形容名詞

あたりまえな、あけすけな、いなせな、勝手な、まめな、

(3) 語幹末尾が撥音（N）の形容名詞

盛んな、変な、野蛮な、損な、勇敢な、モダンな

(4) 語幹末尾が長母音の形容名詞

有能な、無謀な、面倒な、利口な、ラッキーな

(5) 語幹末尾が拗音の形容名詞

やんちゃな、無茶な、エネルギッシュな

(6) 語幹末尾が拗音かつ長母音の形容名詞

異常な、臆病な、優秀な、流暢な、メジャーな

15. 3 形容名詞の m-構造

まず第一に、形容名詞 (AN) (いわゆる形容動詞語幹) (たとえば、「しずかだ、しずかな」における「しずか」) そのものを c-構造上で語として認める必要があることを示す現象が存在する。ある種の助詞は、(1)のように、「しずかだ」などの「AN+だ」ではなく、ANそのものに付く。(正確には、ANを主要部とする句または節につくと考えられる。) また、(2)のように、ANを主要部とする句 ANPを補部にとる表現が数多く存在する。これらの表現は、VP[ru] や AP[ru] も補部にとることができる。

(1) a. ある種の終助詞と

静かか/静かさ/静かよ/静かね

cf. 悲しいか/悲しいさ/悲しいよ/悲しいね

b. 「と」

とても静かと感じる

cf. とても悲しいと感じる

(2) ANPを補部にとる表現

a. ~だの~だの

[国語が嫌] だの [算数が嫌い] だのと、文句ばかり言う。

cf. [料理がまずい] だの [テレビがつまらない] だのと、文句ばかり言う。

b. ~に違いない

太郎は、[子供に親切] に違いない。

cf. 太郎は、[子供にやさしい] に違いない。

c. ~かもしれない

太郎は、[子供に親切] かもしれない。

cf. 太郎は、[子供にやさしい] かもしれない。

d. ~に過ぎない

太郎は、たんに [花子に親切] に過ぎない。

cf. 太郎は、たんに [花子にやさしい] に過ぎない。

e. ~にもかかわらず

太郎は、[花子に親切] にもかかわらず、

cf. 太郎は、[花子にやさしい] にもかかわらず、

f. ~どころか

太郎は、[花子に親切] どころか、

cf. 太郎は、[花子にやさしい] どころか、

- g. ~らしい
太郎は、[花子に親切] らしい。
cf. 太郎は、[花子にやさしい] らしい。
- h. ~みたい
太郎は、[花子に親切] みたいだ。
cf. 太郎は、[花子にやさしい] みたいだ。
- i. ~ながら (逆接)
太郎は、[女性には親切] ながら、
cf. 太郎は、[女性にはやさしい] ながら、
- j. ~なら (条件)
[太郎が女性に親切] なら、
cf. [太郎が女性にやさしい] なら、

また、ある種の繰り返し構文では、ANは名詞と同様に振る舞う。

- (3) 繰り返し構文「確かに～は～だが」
- a. 動 詞
確かに英語を話す*(こと)は話すが
 - b. VN
確かに言語学を研究する*(こと)は(研究)するが
 - c. 形容詞
確かにみんなにやさしい*(こと)はやさしいが
 - d. 名 詞
(?)確かに太郎が党の代表なことは代表だが
確かに太郎が党の代表は代表だが
 - e. AN
確かにみんなに親切なことは親切だが
確かにみんなに親切は親切だが

この構文では、「～は」の直前の要素 ((3)の下線部) は名詞か AN の語、すなわち |<N, +>, <I, ->| の語でなければならない。(第1節(2)参照)

第二に、「親切だ」などの「AN+だ」や、「親切で」などの「AN+で」に関して、「だ」や「で」などがc-構造上AN「親切」を主要部とする句ANPを補部にとっているという分析(4)は支持できない。

- (4) ANP da/de (カッコがANPを示す)
- a. 太郎は、[花子に親切] だ。
 - b. 太郎は、[花子に親切] である。

なぜなら、(4)において、ANPと繫辞「だ/で」との間に、「さえ、も、は」などの助詞(いわゆる

「とりたて詞」)が挿入できないからである。

(5) AN + da

- a. *太郎は、[花子に親切] は/もだ。
- b. 太郎は、[花子に親切で] は/もある。

(6) AN + de

- a. *太郎は、[花子に親切] は/もである。
- b. 太郎は、[花子に親切で] は/もある。

(7) AN + ni

- a. *太郎は、[花子に親切] は/もになった。
- b. 太郎は、[花子に親切に] は/もになった。

(8) AN + na

*太郎が [花子に親切] は/もな時

とりたて詞が挿入できないのは、単に「は、も、さえ」がANPをその補部を取れないだけであり、(4)の分析は依然として正しい、と主張したとしても、それには無理がある。「ANは」、「ANも」という語の連続が可能になる場合が存在するからである(9)。

(9)

- a. AN wa
確かに、太郎は花子に親切は親切だが、
- b. AN mo
花子に親切も親切、こんなに花子に親切な人は、

したがって、「ANだ、ANで、ANな」などは、c-構造上2語としては振る舞わず、1語として振る舞っていると考えられる。これとは対照的に、「研究する」などのVN suruは、c-構造上2語として振る舞う。すなわち、たとえば(10)において、「する」が、VN「研究」を主要部とする句VNPを補部にとっているという分析が可能である。このことは、「研究」と「する」の間に、「さえ、も、は」などの取り立て詞が挿入できることで、確認できる。

(10) VNPする

- a. 太郎は、[言語学を研究] する。
- b. 太郎は、[[言語学を研究] は/も/さえ] する。
- cf. [太郎が [言語学を研究]] の折には、
[太郎が [言語学を研究]] 中に、

(10b)のc-構造は、取り立て詞がVNP「言語学を研究」をその補部にとって句を形成し、この句がダミー動詞「する」の補部になっている。さらに、繋辞がAN以外の品詞につく場合は、取り立て

詞の挿入はかなり自由なようである。すなわち、AN以外の語Xについて、取り立て詞がXPを補部にとって句を成し、その句が繫辞の補部になっているという構造が、可能である。

(11) [XP さえ/も/は] だ

- a. NP
それは、[[大妻女子大学の学生] も] だ。
- b. PP
それは、[[大妻女子大学のキャンパスで] も] だ。
- c. VP[te]
それは、[[大妻女子大学の学生を見て] も] だ。

したがって、ANは、繫辞を伴っていない場合は単独でc-構造上1語として振る舞うが、繫辞を伴っている場合は、ANと繫辞がひと組になって1語として振る舞う、と結論できる。そこで、AN + da、AN + datta、AN + deなどの語形は、すべてm-構造上、AN[1]と繫辞「だ」のそれぞれの語形との複合語(X[1] + X[1]) (第1節(1c)参照)として分析することにする。

この複合語分析を採用するにあたっては、まず、繫辞「だ」が、語や句に後接する接辞のようなものではなく、れっきとした語であることを示さなければならない。「だ」のある語形は、補部を取らずに単独で用いられることがある。話者が、相手が自分の発言に同意してくれたことを受けて発する「だろう!」、「でしょう!」などがそれである。また、「だったら」、「でしたら」は、単独で接続(副)詞として使用される。さらに、「だ」のさまざまな語形が接続(副)詞の要素としてあらわれる(12)。これらは、繫辞を含む複合語と考えられる。

(12) 繫辞(下線部)を含む複合語

だから/ですから
が/だが/ですが、
け(れ)ど/だけ(れ)ど/ですけ(れ)ど
なのに/ですのに、
なので/ですので

したがって、繫辞「だ」とその変化形は語を成しており、AN + da、AN + dattaなどの語形を、m-構造上、AN[1]と繫辞「だ」のそれぞれの語形との複合語であるとする分析には、妥当性があると思われる。この分析を完全なものに仕上げるには、繫辞「だ」のm-CATの吟味、ANのm-構造エントリーの決定、AN[1] m-構造規則の設定などを論じなければならないが、それにはかなりの紙幅を要するので、次回以降にまわすことにする。

参考文献

- 有坂秀世. 1957. 『国語音韻史の研究』増補新版. 三省堂.
- Di Sciullo, A. M. and E. Williams. 1987. *On the Definition of Word*. MIT Press.
- Gazdar, G., E. Klein, G. K. Pullum, and I. A. Sag. 1985. *Generalized Phrase Structure Grammar*. Harvard University Press.

- 松下大三郎. 1930. 『改撰標準日本文法』 中文館書店. [勉誠社複製 1974]
- Ueno, Y. 1994. *Grammatical Functions and Clause Structure in Japanese*. Ph. D. diss.,
University of Chicago.
- 上野義雄. 1998. 「日本語形態論試論 (その1)」『大妻レビュー』第31号. pp. 37-89
- Vance, Timothy J. 1987. *An Introduction to Japanese Phonology*. State University of
New York Press.
- 山口明穂ほか. 1997. 『日本語の歴史』 東京大学出版会.